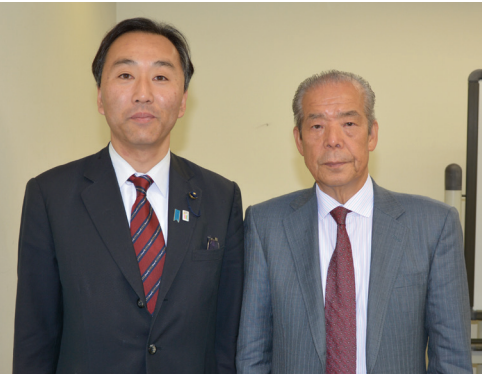


えん罪 警察を監督するシステム強化を 防止へ

飛松五男氏は兵庫県の元捜査一課刑事。

平成17年に姫路で発生した事件では被害者家族からの依頼で独自に捜索し、犯人を特定して逮捕に結びつけました。また、この事件では姫路警察署の職務怠慢な実態も浮き彫りにされています。

いま、警察組織で何が起きているのか。現在は飛松実戦犯罪捜査研究所の代表を務める飛松氏と意見交換しました。



飛松五男・元捜査一課刑事と意見交換

取り調べの可視化遅々たる歩み

【北川】

私は10月の定例県議会で、えん罪防止に向けた「例外なき100%可視化（取り調べの全過程録音録画）の実施」を求めました。しかし、警察本部長から納得ができる答弁は得られず、残念な思いです。

【飛松】

誤った手続きの捜査や取り調べで自白を強要したりする言動は「違法な捜査・取り調べ」となり、その証拠能力は失われて

飛松五男（とびまつ・いつお）
飛松実戦犯罪捜査研究所 代表
元兵庫県警察本部捜査一課刑事。在職中のほとんどは刑事警察ほか捜査部門に所属。姫路の事件では捜査に加わっていただけだったが、被害者家族が旧知だったことからともに捜索し、長年の経験を生かして犯人を割り出した。退職後はコメンテーターとして活躍するほか、警察組織の内情や不正の暴露本などを著している。

しまいます。こうした違法行為をなくす手段として、取り調べの可視化がありますが、実現への歩みは遅々としています。

警察の捜査能力低下に警鐘も 第三者検証委、実戦教育など提案

【北川】

飛松氏が解決に導いた姫路の事件では、刑事の職務怠慢や捜査段階での不手際などがメディアなどでクローズアップされました。

【飛松】

背景には、警察の捜査能力の低下がある。任意同行させ、警察署という密室で取り調べするという仕組みが冤罪を生んでいます。対応策として、第三者検証委員会を設置するという方法もあります。また、不祥事を防ぐためには警察学校の教育の充実、実戦教

また警察内部でも、部下が上司に適切な報告をしなかったり、検察側の実績を積み上げるために強引な証拠採しをするケースが見られます。

【北川】

きちんと法に則った警察官、検察官はいますし、これまでもいたはずですが、警察の不正や不祥事が後を絶たないのはなぜでしょうか。



警察の不正や不祥事について語る飛松元捜査一課刑事

【飛松】

警察は非常に身内意識が強く、組織内では事なかれ主義が貫かれ、この内情を暴露したり不正をただそうとすると煙たがられます。私とその一人です。

警察としてのプライドとやりがい失われ、出世や報酬アップばかり考える人が多くなりました。これも士気の低下や怠慢につながる一因といえます。

際司法の基本ルールになりつつあります。

日本の制度は国際司法から旧時代と揶揄されることもあり、テロ等準備罪の追加や通信傍受法などの法案が適切な判断で遂行できるのか、危惧する声も聞かれます。国連の拷問禁止委員会は日本の刑事司法について「中世」と表現したほどです。

【飛松】

こうした実態をもっと多くの人に伝えていき、風穴を開けないといけない。警察の階級制度も根本的な改革が求められます。

【北川】

えん罪という犯罪をきちんと定義する運動を進めたい。公安委員会機能を適切に働かせ、警察を監督・指導するシステムを強化しなければなりません。

米国のミランダ警告では、取り調べに弁護士が立ち会わない場合の供述は証拠にできないとされています。こうした原則は国

育が不可欠となります。

【北川】